青春紀行

＊53＊

ミヤコ蝶々

人生勝負でっせえ

「しゃべりますさかい、まとめてくれませんか」と言って、蝶々さんは「すんまへんなぁ」と繰り返した。青春ゆかりの地がなかなか浮かんでこなかったからだ。そして、やっと出てきた尾道。

会ったのは大阪・道頓堀の中座。初舞台演目は漫才コンビ「ミヤコ蝶々・南都雄二」の「夫婦善哉」。二十年間続いた。大阪・キタで「蝶々新芸スクール」を主宰、若手を育てている。話し中に出てくるマサちゃんは漫政子さん。現在、六十六歳。（巍）

わたし、青春時代いうたら、旅から旅ですわ。旅で大きいにしてもらいました。それも三日、四日と旅回りの一座で町ちゅう町を転々としましょっしゃろ、どこの町にも行ってるんですけど、どこが、どうや、いわれたかて、覚えてしません。そやから、どこが青春の土地やいわれたかて、そりゃあきまへんわ。昭和二年に九州の炭坑町の劇場で初舞台を踏んだ七つから吉本興業に入る二十三まで落ち着いたことあらしません。格好よういうたら、さすらいの青春ですわなぁ。

＊――同級生も先生も…＊

そりゃ、たいがいの人、小学校出て、中学校出て、高校出て、ちゅうふうに筋がおますわな。そやけどわたしの人生、区別も筋もないんです。学校、行ってへん。そやから同級生おらへんし、先生もおらへん。あんた、子供のときに見たよ、という人しかおらんのですね。よう楽屋の窓から、ランドセル背負った子、見て、うらやましく思いましたよ。一度、みんなが勉強しているところのぞきに行ったことがありますねん。そしたら、役者の子がおるぞ、いわれて、もう、びっくりして逃げて帰りました。さあ、それもどこの町の、どの学校やったやら。

それに、旅回りの子やから、家があらへん。家は田舎の劇場や、楽屋。楽屋ちゅうのはどこでも似たようなもんで、そやから、いま、どこへ行っても、故郷のような気もするし、ちがうような気も。そのころは、小さな町にも劇場がありましてね、ちょっとした町では千人や八百人ぐらい入れる劇場、ザラでした。芝居は夜になってからですけど、昼間、町回りちゅうもんがあるんですわ。一人でも多くお客さんに来てもらいとうて人力車連ねて、のぼり立ててね、練り歩く。両親は一座を持ったというても、しろうとですから、わたしが座長。朝早う着いたりするとわたし、座長やいうたかて、まだ子供ですから眠たいですわね。人力車の上でつい、うとうと。「いやあ、あの娘（こ）寝てるわ、寝てるわ」いう声にびっくりして起きるいうようなもんでね。

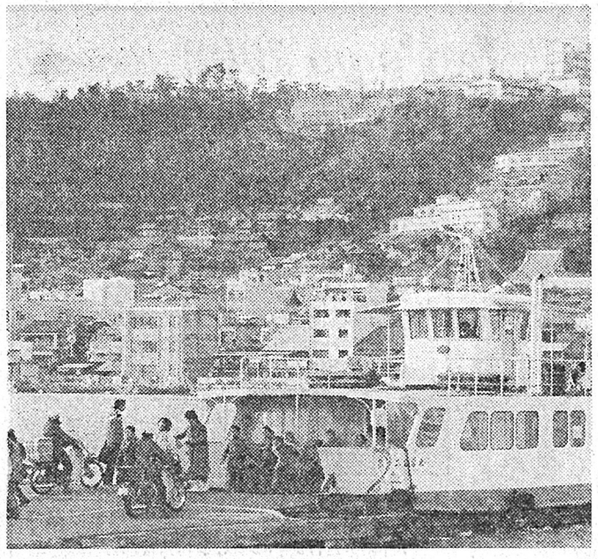
町回りが終わると、また寝て、七時半か八時ごろに幕があきます。座員十二、三人。親子とか、夫婦とか、いとことか、みんな親せきみたいなものでした。そやけど、けいこは厳しかったですね。楽屋で母に舞い扇や三味線のバチでようたたかれました。三味線、洋舞、日舞。それから「安来節」のような唄、漫才。そのころ、少女漫才といって、子供の漫才がうけました。そうそう、長谷川一夫さんの「雪之丞変化（ゆきのじょうへんげ）」が大ヒットしてましてね、わたしたちもこれを持って回ったもんです。わたしが雪之丞でね。安来節もようやりました。

ヘタコにホネなし、ナマコに目なし、わたしゃ、子供で色気なし……

これをうたい出すと、お客さんが手をたたいて笑ってくれましたねえ。子供心にそれがうれしいて、うれしいて、一生懸命やりました。でも、別にえらい役者になろうとも思わなきゃ、立派な舞台を踏みたいとも思わなんだです。それなりの生活がほんまに小さいときから身についてしもうたんですね。例えばの話、いまごろ、山陰を回ると、カニの季節ですわ。どの町へ行ってもカニばっかり。カニ食べすぎて、おなかこわしても、また次でカニが出てくる。そやけど、カニきらいやなんていわん。親もまたそんなこといわさなんだ。出してくれはるものをいただく。ようしたもんで、カニの方が負けて、当たらんようになった。そやからいまでもカニ、大好きです。

それと、娘のころいうたら、船、思い出しますねえ。荷物乗せて、ポンポンポンポン走る小さい船。瀬戸内海をね、船で回るんです。呉、福山、竹原、糸崎……そんなに大きな町ばっかりやないんです。島や小さな町もね。ほんまに小さな船の各駅停車です。各駅に劇場があるんやもんね。船は借り切りです。衣装やら道具が多いしね、定期船なんかよう乗りません。イグサやら魚やらミカンやら乗せる船借りて一座で乗るんです。安かったんでっしゃろなぁ、きっと。ゴザ敷いて、みんな、荷物と一緒にゴロリと横になるんですわ。

わたしはいつも、屋根いうんか、船の一番高い所で寝てました。空を見てました。星を見てましたなぁ。月見てなぁ。みんな下で寝てるのにね。ポンポンポンポン、船が暗い海を走りよる、わたしは、空見てね、唄をよううとうとてました。そのときだけが、わたしの時間やったんですよねえ。まわりがおとなばかりですから、こうやって一人で夜空見ているときが、いちばん楽しいんやないかとね。十四、五のころ、星を見ながら、揺られながら、小さいからだやったけど、思い切り背筋伸ばしてね。お星さんも、お月さんも、ほんまにきれいやった。



▲船着き場の目の前に湊座と魚市場があった。市場も移転し、港ではセリの声が聞かれなくなった

20歳のころのプロマイド

＊――タコてんの味熱く＊

船が着いたら、もう、そんなおっとりしたことというてられへん。仕事や、商売や。そや、思い出しました、尾道。あそこ、懐かしいですねえ。タコ、タコのてんぷら、一本五銭やった。大きなタコの足が。竹ぐしに刺してねえ、おいしかったですよ、あれは。尾道の港に、湊（みなと）座ちゅう、寄席があったんですわ。港の湊座、いや、いや、湊鹿蔵はんちゅう人がやってはったから湊座いうんですけどね。わたしたちの船が着いたら、目の前、もう、そこが寄席ですわ。ちょうど魚市場の前でね、湊はんの住まいの二階、三階が小屋なんです。四百人は入ったでしょうか。うちの一座、困ったらそこへよう行きまんねん。行くと、なんとかしてくれはる劇場だったんですわ。湊座は、とにかく朝がにぎやかでねえ、セリするから。そういう魚市場の人や漁師さんが晩方になると、ふろに入ってから見にきてくれるんです。席は全部、畳でね。木戸口に「都蝶々」というのぼりが、四、五本立ちましてね、下足札が下がっていてね。夜になると湊座の灯りが、海に映り、笑い声が、遠くまで響いたもんです。

なんで湊座のこと、覚えてるか、いうと、その湊はんの所に、マサちゃんという娘さんがいてましてね、わたしより四つ、五つ年上でしたけど、よう、昼間、舞台に座ぶとん敷いて、おじゃみやおはじきをして遊びました。遊ぶいうたかて、年に二日か三日のことなんですけどね、なにしろおとなばかりの中で育ってますから、マサちゃんと遊んだことがなかなか忘れられないんですね。尾道へ行くのが巡業の楽しみでした。湊座の裏に食堂がありました。油のこげるにおいが楽屋の窓から入ってきますんや。タコのてんぷらですわ。おなかがぐうっと鳴ってね、五銭もろうては、買いに行くんです。アツアツをフウフウいいながら、かみちぎる、おいしかったなあ。ころもがようスポッと抜けよったですけどね。その湊座も終戦の直前、建物疎開で壊されてしまいました。食堂も、もう跡形もありません。

＊――駆け落ちし親の愛＊

そんな田舎回りをしているうちに、年ごろになりましてね、恋をしてしもうたんですわ。初恋です。相手は紀州の劇場主の息子はん。結婚を誓うたんですが、先方の親ごさんがね、「旅役者している娘などとんでもない」と反対しましてね。そのぼんぼん、わたしの行くのを待たずに、お嫁さんもらいはった。それを聞いて、楽屋のせんべいぶとんの中で泣きました。もう、腹立つやら悲しいやらで、親へのあてつけみたいにして、一座のなかにいた、「お兄ちゃん」と呼んでいた人とかけ落ちしたんです。十六のときでした。十四、五日してから結局、親のもとに帰ったんですけどね、厳しい父が一言も怒らずに、人目もはばからず、抱きしめて泣くんです。

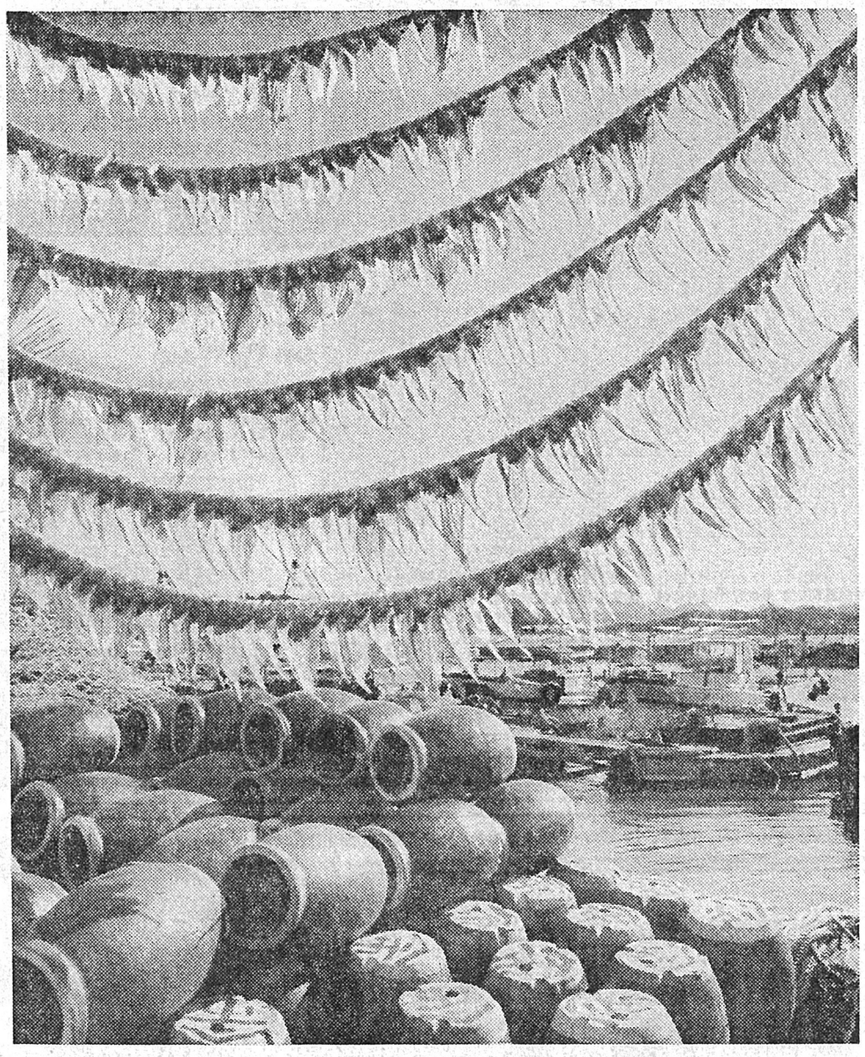
わたしも、もう、ボロボロボロボロと涙があふれて。そんなことがあって、親の大きな、大きな愛情に初めて気がついたんですよ。それからあともわたしの人生、失敗と反省と出直しの繰り返しですけどね、出直しの決意さえしっかりおなかに持てば、失敗はあとあとの薬になりますよ。人様にお説教できるがらではありませんが、ちょっとつまずいたり、世の中で転びそうになった若い人には、そう声をかけたくなるんです。

振り返ってみて損したと思わしません。学校出てへんかて、自然に身についたコケみたいなもの……財産ですわ。いまでも旅に出ますと、昔、あのあたりに劇場があったなと思って行くと、そこは、スーパーとか、駐車場とかね、もうなんにも残ってしまへん。そうですねえ、いまでも広島や岡山へ仕事で行ったとき、尾道からマサちゃんが訪ねてきてくれて、みやげに持ってきてくれる手料理のタコのてんぷら、あれだけになりましたねえ、わたしに青春を思い出させてくれるのは。

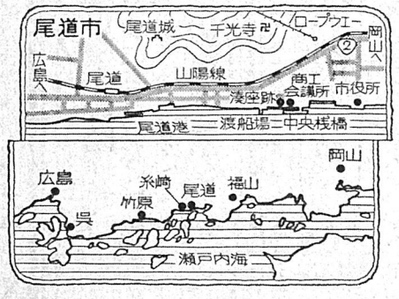
＊　＊　＊

旅から旅 心のオアシス

湊座　尾道



▲尾道水道の浜辺に広がるデビラ干し。冬の日差しを浴びてタコつぼが漁の出番を待っている



＊　＊　＊